

共感覚について

～色聴の検証～

「2つ以上の感覚を同時に体験すること」。
この不思議な体験を幼い頃からしてきた
私はその体験「共感覚」とは何なのか、探
ることにした。

中村 智美

(音楽教育学科音楽教育専攻平成20年度卒業)

目に見える音楽

みなさんは、音楽を聴いていると目の前に映像・画像が見えるという体験をしたことはないだろうか。または数字や文字に色が見えたり、味に形を感じたりしているという方はいないだろうか。

私は幼い頃から音楽を聴くと突然色が見えたり、草原が見えたり、石が見えるという経験をしてきた。このように2つ以上の感覚が結びついて生じることを「共感覚」というらしい。これはスクリヤーピンの発光ピアノについて調べている時に偶然発見した言葉であったのだが、どうやら芸術という分野にはこの「共感覚」とやらを持っている人々が結構いるらしいこともわかった。そこでこの「共感覚」という言葉で私の体験も説明することが出来るのか気になり、卒業論文のテーマとして研究・実験することにした。これから、その結果についてお話ししようと思う。

先行研究の比較と共感覚の定義

さて、「共感覚」という言葉に辿りついたのは良かったのだが、自

分が共感覚であるかどうかを立証する手段を知らなかった。困った私は、ゼミの江崎先生に協力していただき、まず5冊の先行研究から共感覚の定義をまとめ、その定義に自分が当てはまるのか立証していくことにした。

先行研究から見えてきた「共感覚」の定義は幾つかあった。

1つ目は、共感覚にはいくつもの種類があるということだ。曲を聴くと色が浮かんでくる色聴や、文字に色を見るもの、味に形を感じるもの、匂いに色を感じるものなど様々な共感覚の種類がある。しかし同じ色聴の持ち主でも、発動条件や体験している内容には個人差があるらしい。例えば、色聴の共感覚者を集めて同じ曲を聴かせても、見える色や映像は違う。この個人差の原因については未だ解明されていない。個人差の原因として1番に考えられる「過去の経験や周囲の環境」は、共感覚には関係ないという記述があった。しかし、環境や経験に左右されないならば、何に左右されるのであるだろうか。私はこの意見については納得できなかったため、後の実験で検証していこうと思う。

2つ目は、共感覚者たちは2つの感覚を「同時に体験している」

ということだ。共感覚者の中でも、色聴や味に形を感じる共感覚者は、想像力が豊かであるが故の比喩表現なのではないかという風に思われがちである。しかしその説を払拭する実験が先行研究に書かれていた。

まず、図1を数字に色を見る共感覚者と、そうでない人に見せる。そして「この中から2を探し出して下さい。」と伝える。すると共感覚者たちは右下にある「2」で作られている三角形を瞬時に見つけ出すことが出来るのだ。それは、共感覚者たちは5と2では見える色が違う。つまり共感覚者たちには図1が図2の様に見えるということになる。この共感覚者たちが三角形に気づくまでの時間

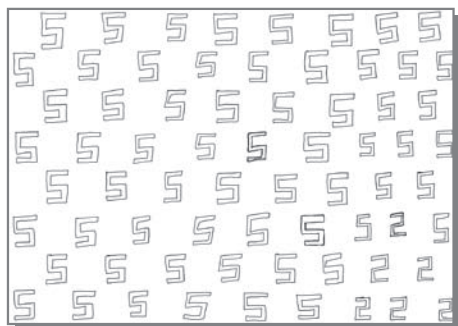


図1 被験者全員に見せる「ポップテスト」

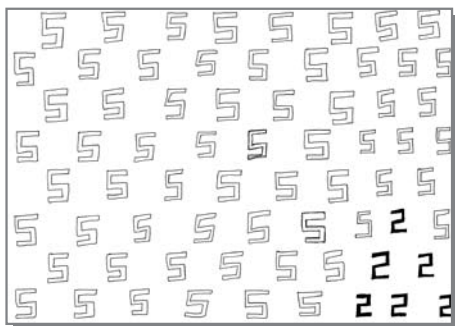


図2 共感覚者が見ている絵

- ・ は、非共感覚者たちに図2を見せた時の反応時間と同じぐらいになる。よって共感覚者たちが、想像で言っているのではなく、実際に体験しているのだという説明がついた。そして他にも、次のような特徴があることが書かれていた。
- ・ 共感覚者の7人中6人は女性であるという事実から、共感覚は家系内を遺伝するものであり、尚且つこの遺伝子は男児には致死性のあるものであるということ
- ・ 共感覚の体験は年齢や時間に関係なく不変的であるということ
- ・ 共感覚を意識的にコントロールするのは不可能だということ
- ・ 薬物使用時や妊娠中など、精

神的に興奮状態時に共感覚を体験することがあること

- ・ 単純な共感覚を多くの人は持っているということ

以上のような特徴を共感覚の定義とすると、自分の体験してきたものは共感覚なのか、それを他人に伝えるためにはどうしたら良いのかという壁にぶつかつた。そこで私は、いろんなジャンルの曲を何曲も聴き、そこに感じたものを実際に絵として具現化してみた。

実験〈自分の反応範囲を知る〉

図3は私がショパンの《エチュード op.10-4, cis-moll》を聴いた時の絵である。これはガラスが割れて、底なしの暗闇の中を

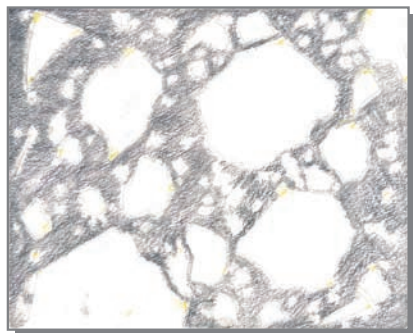


図3 ショパン：《エチュード op.10-4》の絵

その破片がキラキラと輝きながら落ちていく様子が浮かんだのだ。この様に時代・ジャンル・作曲家や楽器編成の違う曲を何曲も聴いて、それを何枚も絵にしていこう。すると、私はピアノ曲、特に古典からロマン時代の作曲家のピアノ曲に反応が強いことなど、幾つかの条件が見えてきた。この条件に反応する理由は私の育ってきた環境が影響していると推測し、同じ実験を私の双子の妹と、7つ離れた弟にも実施して比較してみた。すると、妹や弟は曲を聴いた時、まずその曲の印象を頭の中で「言葉」にしてから、その「言葉」のイメージに近い色や物を描いていた。私の場合は妹や弟と違い、「言葉」にしないで目の前に自然に見えてくる。このイメージを「言葉」にする、「言葉」を使うかどうかという違いが、共感覚の程度を示す指標のひとつではないかと私には思われた。この実験結果と共感覚の定義をふまえ、自身の経験を考えてみると、自分は反応する範囲に制限のある低次の共感覚者なのではないだろうかと推論するにいたつた。

今回のこの実験では、残念ながら私以外の共感覚者に出会い、同じ実験をすることが出来なかつた

ので、共感覚体験の個人差と育ってきた環境との関係性については検証することが出来なかつた。しかし、「言葉」を媒介とする単純な共感覚がもっと研究されるようになれば、これからの音楽教育の世界やCM・映画産業での音楽と言葉・映像との関係性に、新しい1つの手法が生まれることになるのだろう。そしてかつての私のように共感覚という不思議な体験に悩まされている人が、少しでも元気になるような研究になるように、これからも実験・検証していこうと思う。

参考文献

- ◆ リチャード・E・シトラーウィック著 山下篤子訳『共感覚者の驚くべき日常の形を味わう人、色を聴く人』草思社、2002（請求記号：●J97-605）
- ◆ パトリシア・リン・ダフィー著 石田理恵訳『ねこは青、子ねこは黄緑、共感覚者が自ら語る不思議な世界』早川書房、2002（請求記号：●J97-760）
- ◆ ジョン・ハリソン著 松尾香弥子訳『共感覚〜もつと奇妙な知覚世界〜』新曜社、2006（請求記号：●J108-654）
- ◆ ルリヤ著 天野清訳『ルリヤ現代の心理学 上』文芸総合出版、1980
- ◆ VSI/レプチャントリン/EM/ハバード 共著 古川奈々子訳『数字に色を見る人たち〜共感覚から脳を探る〜』『日経サイエンス』2003年8月1日発行 第33巻第8号

● なかむら ともみ 共感覚の事もっとよく知りたい！頑張って勉強します。そして、この場をお借りして江崎公子先生、山脇一宏先生に改めて御礼申し上げます。